

3. 新中学校候補地の検討

3. 新中学校候補地の検討

3-1. 整備方針

3つの中学校の統合により、学級数は全18学級程度（各学年5クラス、特別支援学級3クラス）を想定している。450人に及ぶ生徒がそれを支える40人程の教職員と学び、活動する場であるとともに、市民に開かれた学校として十分な規模と使い易さをもった施設をめざし、前述した各項目の実現を図る。

3-2. 候補地の位置

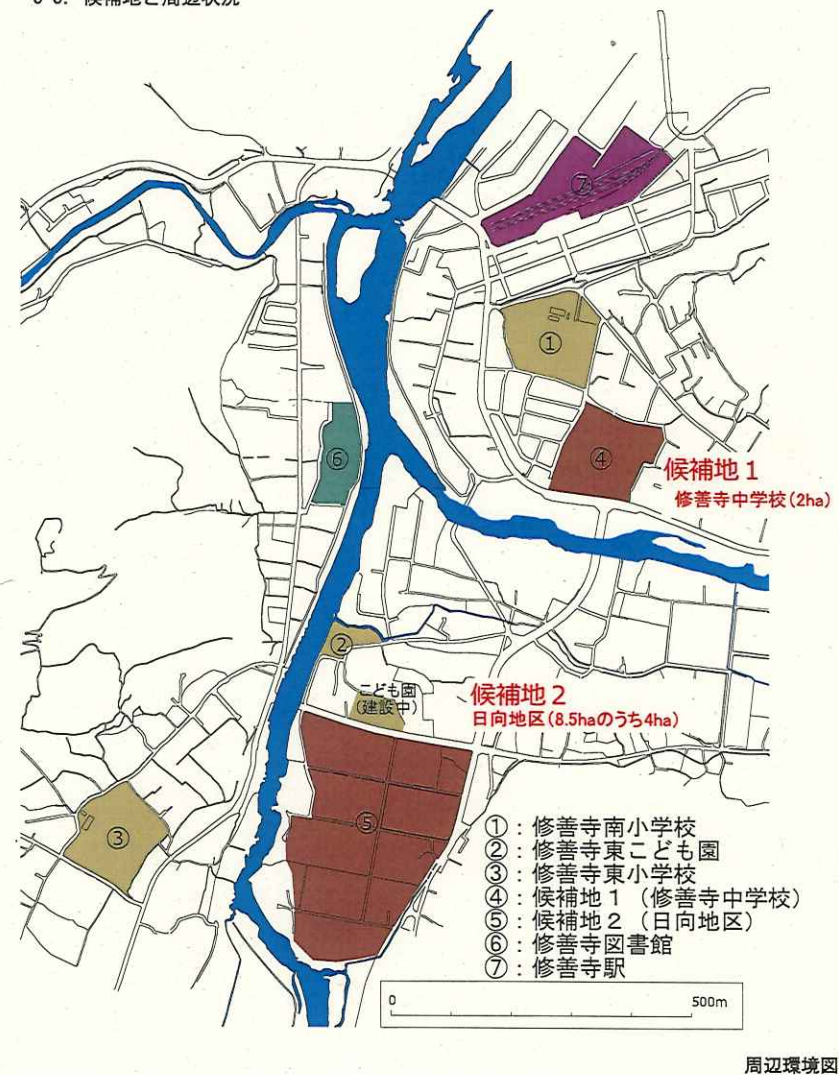
生徒の通学について、公共交通をベースに考え、鉄道やバスなどの交通の便がよく、中伊豆地区、天城地区からの通学にも便のよい修善寺地区に設定する。

より良い教育環境を創出するためには、同一敷地内での部活動や学校行事への保護者が来校した時の対応ができること、また生徒がのびのびと活動し、安全に生活するためには3～4haの校地が必要であり、通学路や避難路としての周辺道路が整備できる場所が適切である。

以上の観点から、新中学校の敷地候補地として、現修善寺中学校校地と日向地区について、検討を行う。



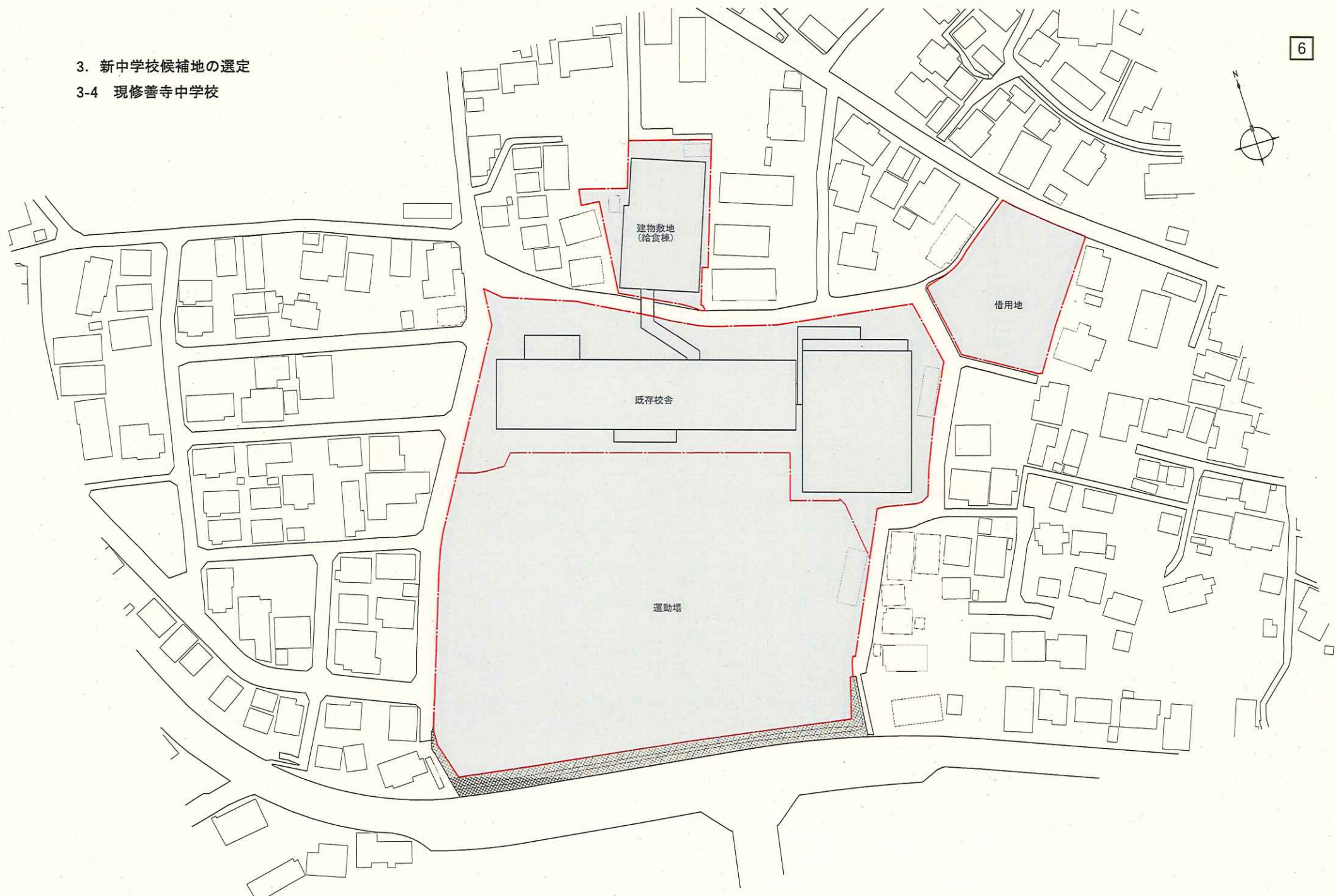
3-3. 候補地と周辺状況



3-3. 候補地と周辺状況

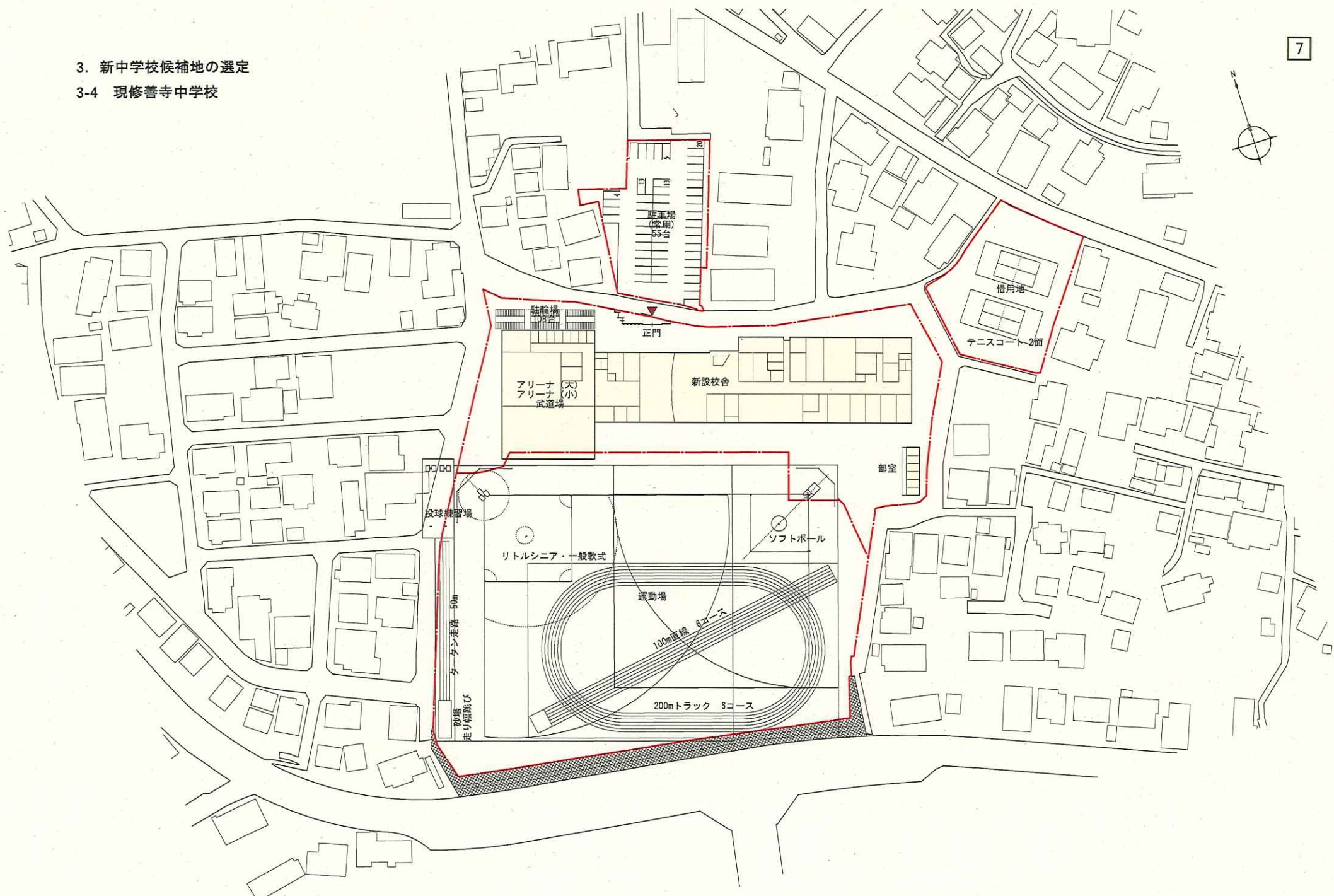
3. 新中学校候補地の選定

3-4 現修善寺中学校

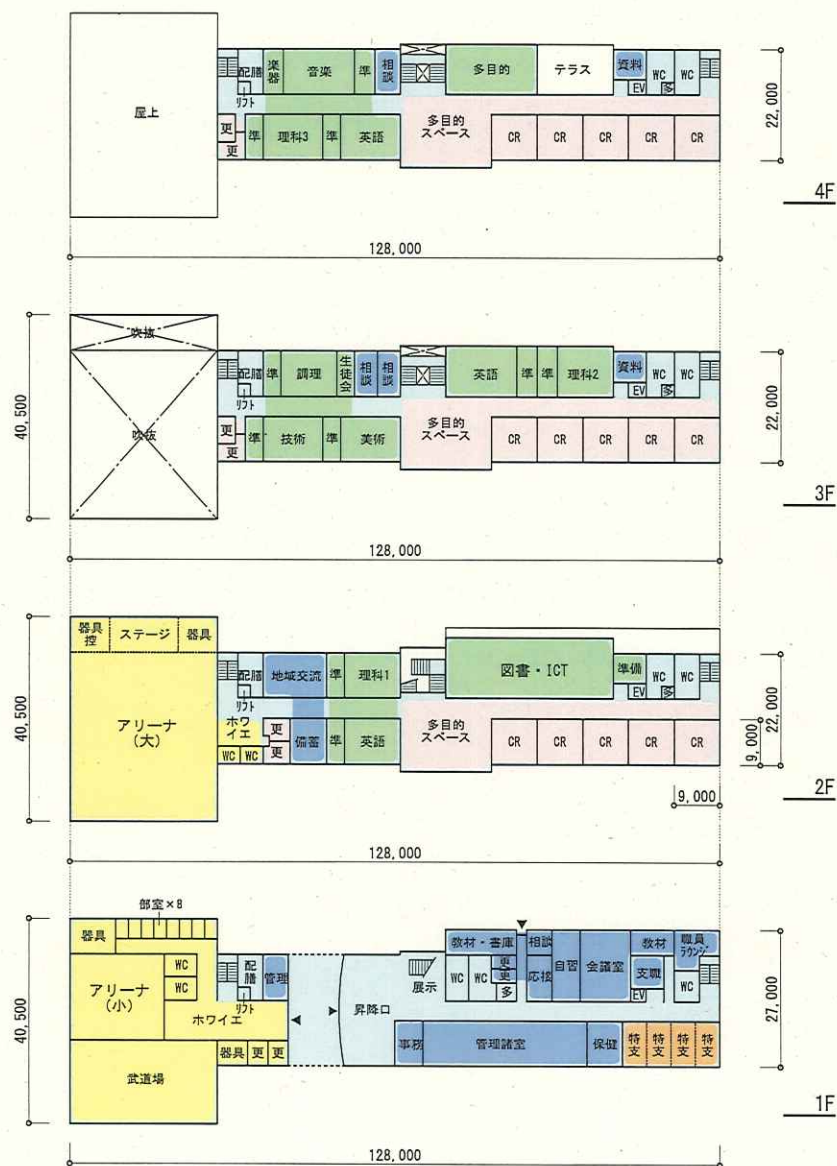


3. 新中学校候補地の選定

3-4 現修善寺中学校



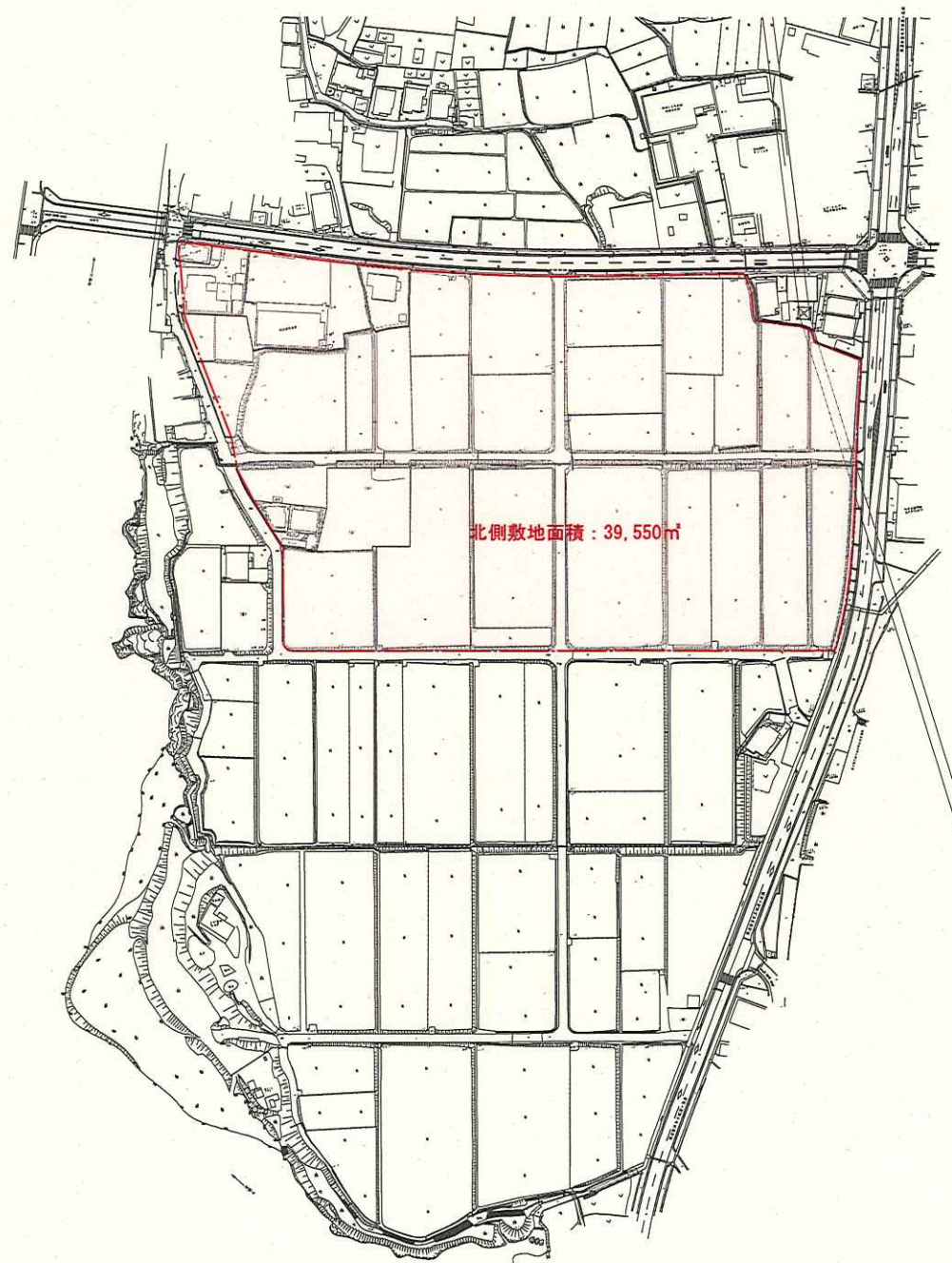
3-4 現修善寺中学校



新校舎 延べ床面積 11,500㎡

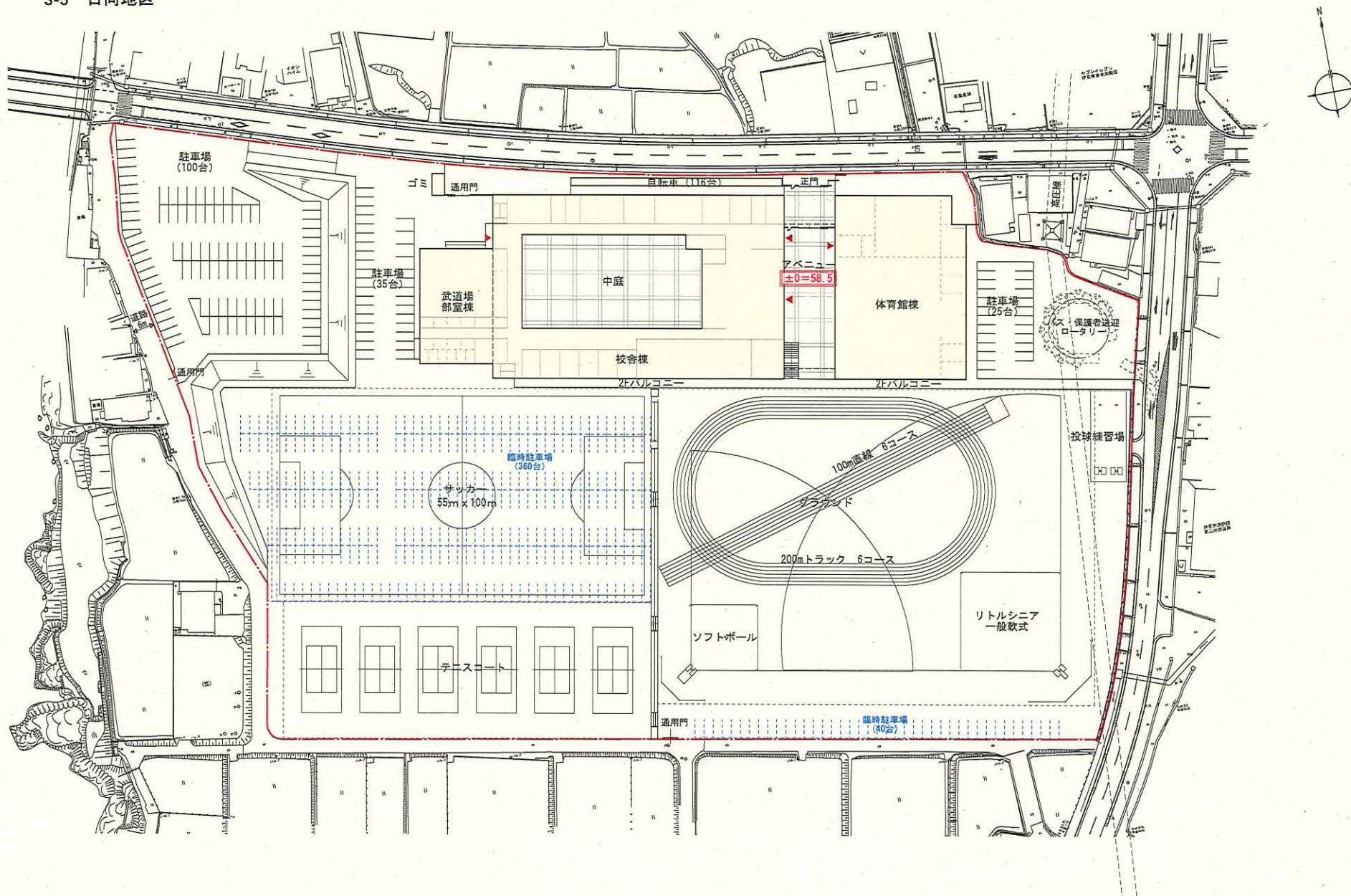
3. 新中学校候補地の選定

3-5 日向地区



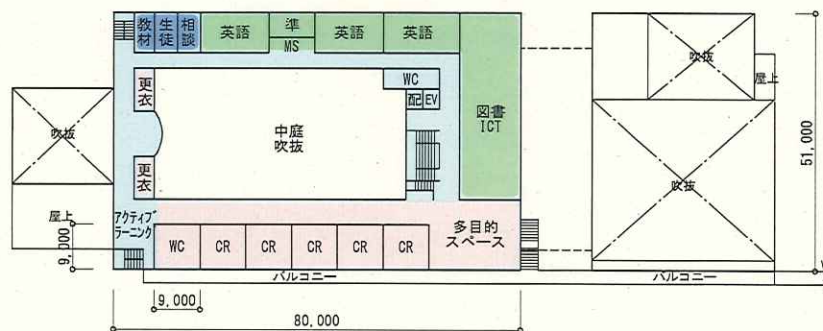
3. 新中学校候補地の選定

3-5 日向地区

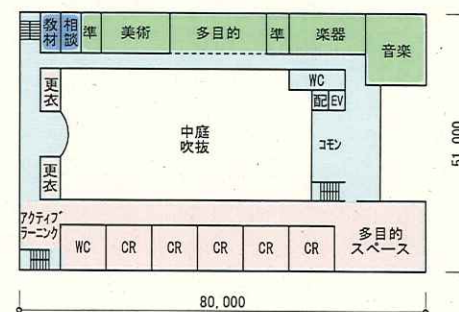


3. 新中学校候補地の選定

3-5 日向地区

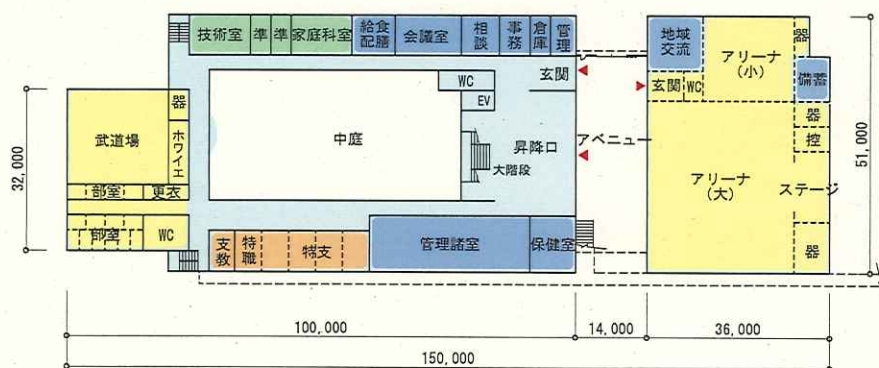


2F

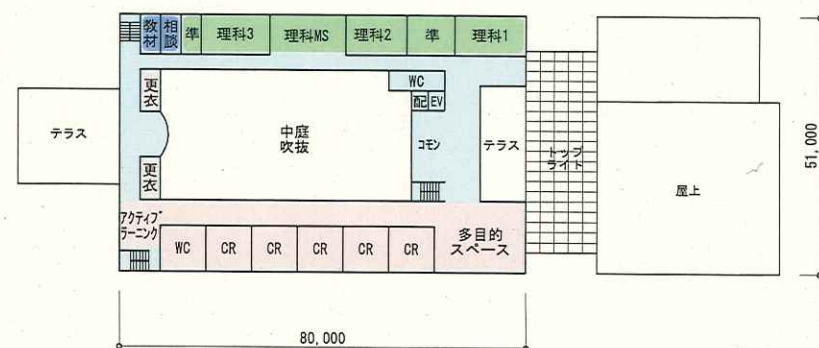


4F

- 普通教室
- 特別教室
- 体育館
- 特別支援教室
- 管理部門



1F



3F

新校舎 延べ床面積 13,300㎡

3-6. 各候補地のまとめ及び考察

敷地関係、工事関係、学校運営関係、防災関係の4つの大項目とそれぞれに細目として5項目ずつあげ、比較検討を行った。

以下に、検討の概要を示す。(以下、修中、日向地区と表示)

【立地】

敷地：修中は駅から徒歩10分圏内で利便性は高い。

位置：3校区から新しい中学校に通うという共通の意識への配慮が必要

通学：修中は駅が近く、バス路線も集中しており交通の利便性が高い。一方、修中付近の道路は、狭隘で歩道もなく危険。日向地区は周辺の道路に歩道が設けられ、広くゆとりがある。また、日向地区の北東には修善寺～中伊豆方面のバス停があり、北西には修善寺～湯ヶ島方面へのバス停があり、バス通学等の便もよい。

周辺環境：修中は住宅が近接し、日照や騒音、砂塵等に配慮が必要である。

道路状況：修中の周辺道路は狭隘であり、緊急車両等の寄付きが厳しい。

【工事】

用地：修中は約20,000㎡で狭い。用地の取得費はかからないが、別途グラウンドの手配が必要である。日向地区は用地取得費とインフラ整備費が発生するが、十分な広さの校地が確保できる。

工事進入路：修中は住宅地内を通るルートとなるため、近隣との調整が必要。日向地区は、問題は無い。

現校舎等：修中は仮設校舎及び校舎の解体が発生する。仮設校舎で中学生生活のほとんどを過ごす生徒がでる。

工期：修中は約2年9ヵ月、日向は、約2年8ヵ月の工期となる。

工事費：仮設校舎の費用を含め、修中の方が若干安い。

【学校運営】

校舎配置：修中では南側の擁壁への影響を考慮すると、新校舎の位置が現在の位置にほぼ限定され、校舎計画の自由度が低くなる。一方、日向地区では自由な校舎配置が可能である。

学習環境：修中では中廊下を軸として教室配置を行うため、学習環境が単調になりやすい。日向地区では、基本片廊下で中庭を設けた明るい空間が可能である。

生活環境：修中での中廊下型は、通風や採光に制限がある。日向地区では日当たりや風通しの良い環境が創出できる。

グラウンド：修中はサッカーコートとテニスコートが敷地内では取れないが、日向地区ではすべての配置が可能である。

駐車場：日向地区では、常用駐車場60台とイベント時の臨時駐車場が確保できるが、修中では50台程度の常設駐車場は配置できるが、臨時駐車場は設けることができない。

【防災】

地震：南海トラフ地震での想定震度は、修中6弱、日向地区で5強～6弱であるが、修中の南側の高い擁壁は安全性の検討が必要である。

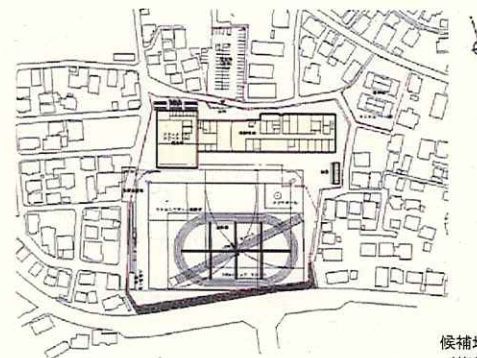
風水害：修中は、ハザードマップでは浸水災害の想定はない。日向地区では、狩野川沿いで0.3～3m程度の浸水区域が想定されている。

校舎は鉄筋コンクリートを想定しており、風の影響は受けない。

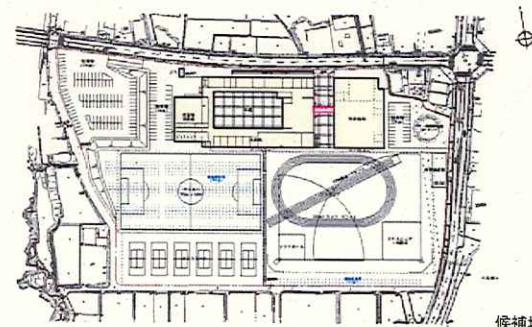
土砂災害：日向地区では一部土砂災害の想定区域があるが、対策を講じることで建設は可能。修中は土砂災害の想定区域ではないが、南側の擁壁の安全性の確認等が必要である。

避難：修中は大型輸送車両の寄付きやヘリコプターによる救援は難しい。日向地区では校地が広くとれるので、これら車両やヘリの受け入れが可能であり、長期避難所として受け入れる場合に避難者と生徒との住み分けも当初から計画をしておけば可能である。

以上の観点から、候補地は日向地区とし、検討を行っていく。



候補地1 配置試案
(修善寺中校地)



候補地2 配置試案
(日向地区)

※これらの配置試案は本構想におけるもので、実際の計画とは異なります。

共同設計・高橋茂弥建築設計事務所 共同

3-7. 各候補地の比較表

評価基準：5＝全く問題ない、4＝多少問題がある、3＝問題がある、2＝多くの問題がある、1＝大変な問題がある

項目	現修善寺中学校校地			日向地区		
	内容	評価	レーダーチャート	内容	評価	レーダーチャート
立地	敷地 修善寺駅から徒歩10分程度の距離にあり利便性は良い 南に開けた、日当たりのよい敷地である 南側の擁壁の検討が必要(現行の建築基準では大幅に土地が削られる可能性がある上、土地面積が2ha程度に制限される)	3	現修善寺中学校校地 立地関連の特性	計画地は、修善寺中より直線距離で南に約600mのところであり、修善寺駅から徒歩約20分の距離にある 敷地全体はおおむね平坦であり、日当たりも良好である	4	日向地区 立地関連の特性
	位置 3校の生徒にとって一つになった新たな中学校であるという共通の意識に温度差が生じる	3		中伊豆・天城地区の合流点であり、伊豆市の中心に近い位置であり交通の結節点であることから、3校区から新しい中学校に通うという意識が共通に醸成される	4	
	通学 周辺道路は狭路であり歩道も十分に整備されておらず、通学等危険である 県道伊東修善寺線に擁壁で接し、高台となっており、直接アプローチはできないため徒歩や自転車通学の場合、大半の生徒は駅方面からの坂道を通学することになる 駅が近く、現状のバス路線で通学できるが、中・高校生の保護者による送迎と重なり駅周辺の混雑が予想される	3		周辺道路には歩道が整備されており、安全に通学ができる 県道修善寺天城線に接し、車利用の利便性は良い 北側の道路に、通学専用のバス停を誘致することができる 修善寺駅からの通学について、距離は伸びるが高低差は少ない 駅までの動線と離れるため、送迎車両と通学車両の混雑緩和が予想されるが、駅から学校まで安全に通学できる方法を検討する必要がある	4	
	周辺環境 市街地の住宅密集地の中にあるが、比較的静かで落ち着いた環境である 一方で、周辺の密集した住宅に対する日照・騒音・砂塵などに留意する必要がある 修善寺南小学校が近接しており、小中連携教育の環境が整っている	3		田園が広がる静かでのどかな環境である 数軒ではあるが、住宅等が点在しており日照・騒音・砂塵などに留意する必要がある 修善寺南小学校、修善寺東小学校が近くにあり、東こども園も近接しており、連携することができる	4	
	道路状況 敷地へのアプローチは北及び西側の道路よりアクセスすることになるが、道路幅員は4mと狭く、形状は入り組んでおり、高低差もあるため、緊急車両及び大型バスのアクセスに難がある 参観会など多くの車両での乗入の際は、交通渋滞による近隣への影響が懸念される	2		北、東側で対面通行の道路に接しており、車利用には便利であり、緊急車両及び大型バスのアクセスは容易である	5	
小計		14			21	
工事	用地 現修善寺中学校校地は約20,000㎡となっており、用地の取得費はかからないが、グラウンド等の用地の手当てが別途必要である 調整池は現行基準で検討が必要となる可能性がある	4	現修善寺中学校校地 工事関連の特性	現況は水田であり、用地取得費と造成が必要である(40,000㎡) 開発協議が必要 下水道が未整備であり、合併浄化槽または、区域外流入の手続きが必要 調整池、2500㎡が必要(グラウンドを利用する) 埋設されたパイプラインの処理が必要	2	日向地区 工事関連の特性
	工事進入路 工事進入路は、住宅地の中を通るルートとなり、車両の運行に注意が必要となる (大型車両での資材搬入には、搬入路整備、近隣調整の検討が必要となる)	2		北及び東の道路から進入が可能であり、大型車両での資材搬入は容易である	5	
	現校舎等 運動場に仮設校舎を設けるため、約2年間グラウンドがかなり狭くなる 仮設校舎で中学校生活のほとんどを過ごす生徒、教師への負担が生じる 既設校舎のとりこわし費用が発生する	1		新規工事として造成後、建設工事を行う事となるため、生徒、教師への負担は生じない 土地購入が必要となるが、農用地が主となるため、宅地と比べ取得費用は軽減される	5	
	工期 仮設校舎：4か月 校舎解体：6か月 校舎建設：20か月 仮設校舎・グラウンド整備：3か月 合計2年9か月 (校舎は鉄筋コンクリート造4階建を想定)	4		造成：12か月 校舎建設：20か月(グラウンド整備共) 合計2年8か月 (校舎は鉄筋コンクリート造4階建を想定)	4	
	工事費 仮設校舎： 4.2億円 解体費： 4.5億円 校舎・グラウンド： 46.0億円 (11,500㎡) 合計： 54.7億円 ※地盤条件は不明であり、調査が必要	5		造成費： 5.0億円 校舎・グラウンド： 53.2億円 (13,300㎡) 合計： 58.2億円 ※地盤条件は不明であり、調査が必要	4	
小計		16			20	

評価基準: 5=全く問題ない、4=多少問題がある、3=問題がある、2=多くの問題がある、1=大変な問題がある

項目	現修善寺中学校校地			日向地区		
	内容	評価	レーダーチャート	内容	評価	レーダーチャート
学校運営	校舎配置 南側擁壁に影響を与えないよう、現校舎位置に4階建てを配置 現行同様に南側にグラウンドを設ける設計となる可能性が高い(選択肢が制限される) 計画の自由度が低い	3	現修善寺中学校校地 学校運営関連の特性	計画の自由度が高く、自由な校舎配置が可能 一般的には敷地北側に4階建てを配置するが、階層についても変更が可能である	5	日向地区 学校運営関連の特性
	学習環境 敷地にゆとりがなく、中廊下型での計画となり、環境は良くない 校舎の形態は、中廊下を軸として空間配置を行うため、学習環境は単調になりやすい	3		敷地にゆとりがあり、様々な校舎形態が可能で、ロの字、コの字型校舎であれば中庭を含め、様々な学習空間を配置することで、風、砂等に配慮した設計も出来る	5	
	生活環境 校舎の形態は中廊下型となり、通風や採光に制限が生じ、自由な学校運営については、やや難がある	3		中庭を設けることも可能であり、通風や採光がとりやすく、天候、気候にも配慮することができる	5	
	グラウンド 陸上トラックと野球、ソフトボールグラウンドを配置する 借用地にテニスコートを2面配置する サッカーコートとテニスコート4面は敷地外で手当する必要がある グラウンド等の砂塵対策は飛散しにくい表層砂の使用や防砂ネットの設置などを検討する	2		陸上トラック、野球、ソフトボールグラウンドとサッカーコート及びテニスコート6面が同一敷地内に配置できる グラウンド等の砂塵対策は飛散しにくい表層砂の使用や防砂ネットの設置などを検討する	5	
	駐車場 現給食調理室の敷地に、50台程度の常用駐車場の配置が可能 臨時駐車場は常設では取れない(現在は修善寺南小グラウンドを借用)	1		常用駐車場60台、臨時駐車場としてグラウンドを使い、多くの車両が駐車可能	5	
小計		12			25	
防災	地震 南海トラフ地震での想定震度は「6弱」である 高台にあり、南側の高い擁壁が地震で崩壊する危険性を含む 液状化の評価対象外である(対象となる地層がない)	4	現修善寺中学校校地 防災関連の特性	南海トラフ地震での想定震度は「5強～6弱」となっている 平坦地であり、地盤に対する危険性はない 液状化の評価対象外である(対象となる地層がない)	5	日向地区 防災関連の特性
	水害風害 水害: ハザードマップでは浸水災害が予想される区域にはなっていない 風害: 施設は鉄筋コンクリート造を基本とするため、風による影響はない	5		水害: 狩野川の近くで一部に浸水想定があるため、対策が必要 風害: 施設は鉄筋コンクリート造を基本とするため、風による影響はない	4	
	土砂災害 ハザードマップでは土砂災害が予想される区域にはなっていない 高台にあり、南側の高い擁壁については注意が必要である	3		ハザードマップでは土砂災害が予想される区域が部分的に含まれるため、対策が必要	3	
	避難 周辺の道路状況から、車での避難は困難である 大型緊急車両の受入に難がある 被災直後などの生徒の受渡においては、周辺道路が狭く混乱する恐れがある	2		避難所として車や大型緊急車両のアクセスが可能である 被災直後などの生徒の受渡においては、2路線の基幹道路と接しているのでも多方面からのアクセスが可能であり、道路の寸断などにも複数経路での対応が可能である	5	
	救援避難生活 周辺道路が狭路であり大型輸送車両の受け入れが困難 住宅が密集しており、ヘリポートとしてグラウンドの利用に難がある 長期避難所として開放することを想定すると敷地が限られており、学校を再開する場合に避難者と生徒の棲み分けが難しい	2		大型輸送車両の受け入れが可能 ヘリポートとしてグラウンドの利用は可能である さらに、グラウンドの一部芝生化等の対応により、ヘリコプターによる砂塵の飛散等は抑制できる 長期避難所として開放することを想定しながら計画することが可能であり、学校を再開する場合に避難者と生徒の棲み分けも容易である	5	
小計		16			22	
合計		58			88	